

あつろの 杜 山本雅彦さん

フォトグラファー

Interview

「町の床屋さん」のような写真家でありたいという山本雅彦さん。長年続けた新芸能集団「乱拍子」が今年4月にチュニジアで行った公演を写真集にしました。

「町の床屋さん」感覚で撮る

私は小樽で生まれ育ちました。そのあと札幌です。若い時って自分が何をしたいかわかりませんので、大学を出てから五〜六年、自分探しの旅をしていました。

たまたま園芸の月刊誌を出している札幌の出版社が社員を募集していたので受けてみたら合格。しかし勤めて二年ほどで潰れてしまい、それで写真の仕事に。最初はスポーツカメラマンでした。そのうちにステージの写真も撮り始めた。同じ機材で撮れますし、近くで撮るというのもすごく魅力的だなと思っただけです。

フォトグラファーというと芸術的な写真を撮る人と思われがちですが、私は身近な存在を被写体にした写真を撮ろうと心がけています。親しみを込めて写真を見てもらえるような「町の床屋さん」のような存在でありたい。どこにでもある日常的なスナップ写真を撮っていければいいなあと。しかも相

手の気持ちをしつかりと汲んでいる写真ですね。その人の内面を引き出すことに魅力を感じながら写真を撮っていますから。そのせいかどうしても人物写真が多くなりますね。

「乱拍子」

「乱拍子」代表の村場辰彦さんは



「乱拍子」の内面を写し出す写真を求め…

山本雅彦
やまもとまさひこ

1955年小樽市生まれ。大学卒業後、旅を通して人のこたわりにふれる機会に出会う。
・釣り針を真っ直ぐに打ち直し魚がかからないのに釣り糸をたれる釣り人
・モヤシのヘタを一本一本丹念に取りお客に出しているラーメン屋店主、など
人が何かにこだわる表情、視線、心の在り方に人生の妙を感じている。現在は札幌市内の保育園・幼稚園の行事撮影をするかわら「乱拍子」を始めとするライブステージ等の撮影を手がける。「乱拍子」写真集の刊行も予定している。

新芸能集団「乱拍子」

村場辰彦・容子夫妻で始めた村場流八丈太鼓に息子たちや義理の弟が加わり、1999年に立ち上げる。和太鼓を柱とした伝統芸能の流れを汲みながら、新しい太鼓の響きを北海道に生み出そうと、オリジナルの創作活動に挑戦している。2011年アメリカ、2013年インド、2017年チュニジアなど、海外でも公演を行っている。



鹿兒島県出身ですが、東京の国立音楽大学に入学し、そこで八丈太鼓に出会います。その八丈太鼓の稽古に何年も通い詰めて、今まで外部の人が賞を取ったことのない、おらが町の八丈太鼓の大会で準優勝をした。それは単なる準優勝ではなくて八丈太鼓の人たちが村場さんを認めたという証だったんでしょうね。

その村場さんが同じ国立音大の女性と結婚し、東京で太鼓をやっていたが、音がうるさくて練習も仕事もできなかった。それで北海道に練習場を求めてやって来た。広い北海道は彼らの志に合った場

所だったんですね。

現在の「乱拍子」の編成は、村場夫妻と子どもたち、それに奥さんの弟という村場ファミリーと劇団員一七〜一八人、あとスタッフが一〇人ぐらいです。なかなか大変なことが多いのですが、一つひとつ精魂込めて物事に当たる村場さんを見ていると、人間の力というものを感じます。

「乱拍子」との出会い

私は撮影をしていく中で「乱拍子」と出会ったのですが、最初に出会ったとき、劇団内で「やめた」「やってられないよ」という大喧嘩をしていたんです。芸のことが喧嘩の原因でした。「すごい。人前でこんなことを平気でやるんだ」と思いました。

「乱拍子」の生活のすべてが太鼓や里神楽などの芸中心です。防音装置が付いている学校や芸術の森などで毎日練習をしています。ちよつとしたことでもみんな話し合います。とても深く話し合います。まさに家族の繋がりでですね。昭和の初期とか大正時代の生活をいまだにしているような感じですよ。

彼らに「出会えてよかったなあ」と思います。一人ひとりそれぞれに魅力がありますし、個性的だし、

人間性豊かな人たちですから。

被写体

「乱拍子」の人たちを撮ってみると、その表情がなかなかいいんですよ。それで、彼らの日常を覗いてみたいと思い、撮影するようになりまして。今では年中ほとんど関わっており、時間がある時は必ず家に行ったりしています。

彼らが意図するパフォーマンスがちゃんとできているか。そこにシャッターチャンスを探っています。

何気ない彼らの笑顔の裏には、本当はちよつとした心配事を抱えたりしている。車が壊れてどうにかしなければいけないとか、公演に使う太鼓が破れる寸前で、そのお金をどう工面するかとか、そんないろんな難しいことを潜り抜けて本番の舞台上に立つわけです。そのとき彼らがどういう表情をするのか、つぶさに見たいと思っっています。彼らの苦悩を写し出せれば最高ですね。

みなさんにも、ぜひ「乱拍子」のパフォーマンスを見ていただきたいですね。舞台上で彼らの才能がほとばしっていますから。自分たちが志した芸にしっかりと評価をしてもらえることが、彼らの生きがいだと思います。